

2022年8月11日（木）

老球の細道683号

### 蝉しぐれ

会津バスケットボール協会 室井 富仁

作家藤沢周平の代表的な名作に『蝉しぐれ』がある。会津高校に勤務していた頃、新任の校長として赴任してきた堀幸一郎校長先生（元高体連バスケットボール部会長、会津坂下町教育長）の着任の挨拶で、その「蝉しぐれ」の内容がスピーチされた。内容は覚えていないが、その後藤沢周平の小説を読むきっかけとなった。いずれも世の中の理不尽さや市井の人々のたくましさを描いた作品が多い。

今回の話は私と孫の正真正銘の蝉しぐれ、蝉取り、虫捕りの話である。孫たちの夏休みも後半になってきた。コロナのせいで学校や地域で行う行事、遊びがなくなり、毎日家でテレビ、パソコンに浸りきっている孫たちを見て危機感を感じていた。「運動をさせなければ・・・」「自然に触れさせなければ・・・」（わが子供に対しては思わなかったのに・・・）。

思えば、私たちの少年時代（幼稚園、小学校低学年頃）は夏休みになると、朝は町内のラジオ体操から始まり、日中は近所の友達と山や川に行き虫捕り、魚とり、水泳と朝から陽が暮れるまで汗だくになって遊びまわったものである。日に焼けて全身真っ黒。このような遊び、運動が後のスポーツ活動の土台を作り、今でいうコーディネーショントレーニングとしてバスケットボールにも影響を与えていたのかもしれない。

夏休みの孫たちの遊び相手は爺、婆の仕事である。昭和を思い出して孫たちと毎日「虫捕り爺さん」になって活動している。連日猛暑の中でセミの鳴き声満載「蝉しぐれ」である。

適当な場所を発見した。会津体育館の東側にある運動公園である。バスケットボールの大会で会津体育館にはよく来ていたが、運動公園には孫ができるまでは一度も来たことがなかった。広々とした場所に大きな遊具や運動施設、ウォーキングコース、そして35度を超す猛暑の中でも涼しく過ごせる場所が数多くある絶好のプレイグラウンドである。

「蝉時雨」のBGMの中、「採ってみろ」と挑発するようにあちこちの木々に悠然と止まっている蝉。公園の中にある池にはスピード、クイックネス抜群の「シオカラトンボ」がこれまた「採ってみろ」と1：1の戦いを仕掛けてくる。孫は意欲満々、採る気満々である。

私と孫は挑発する蝉とトンボに戦いを挑む。最初の頃収穫はなかったが、やはり反復練習は嘘つかない。毎日通ううちに蝉のいる場所が容易に見つかるようになった。蝉を探して木の上を眺めているうちに背筋も伸びる副反応も起こった。虫捕りも捨てたものではない。

不可能と思われたシオカラトンボの捕獲は、止まっている時のみならず飛んでいる時も捕獲することができ、あの「努力の後の勝利」の達成感が蘇った。孫に手柄を分けなければならぬ立場なのに爺己満足の嵐と化してしまった。加齢に負けない華麗な網裁き。

今夏、公園に虫捕りに行った爺さんは、孫の捕獲した時の満面の笑顔を見て、改めて人に喜びを与えることこそわが喜びであると実感させられた。残りの人生を生きることは、今まで私と孫とで与えてもらった喜び、笑顔を他人に返してやることである。なんちゃって！。